

知ろう! 仏教讃歌

(7)

山口 篤子

《みほとけは》

詞・仲野良一
曲・信時 潔

世代超えて歌える曲として公募

大学音楽学部)を通じて大谷派などの仏教讃歌を作っており、その縁でこの作品を手掛けることになったようです。翌48年の初演では『みめぐみの』(河合恒人作詞、古関裕而作曲)、《咲き匂う》(岡俊樹作詞、平井康三郎作曲)など、現在も愛唱される作品がともに演奏されました。これを皮切りに、大谷楽苑から

は全部で30作品が発表されることになりました。

同じ頃、私たちの宗門でも新しい仏教讃歌を生み出そうという動きが活発になりました。4月1日号で紹介した、仏教讃歌刊行普及会の《恩徳讃》(新譜、清水脩作曲)発表は、その代表的な出来事のひとつです。第2次世界大戦後、日本の社会が大きな変化を遂げるなか、仏教音楽の新たな在り方が模索され、世に送り出された作品が今なお歌われ続けています。その事実、新しい時代を表現しようとした歌の持つエネルギーを感じずにはいられません。

(本願寺派総合研究所 仏教音楽・儀礼研究室研究員)

「新仏教聖歌 入選者決る」

今から約70年前の1947年5月、毎日新聞大阪版にこの見出しの記事が掲載されました。

そこには新しい仏教聖歌(仏教讃歌の戦前の呼称)を作るために歌詞が公募されたこと、またその審査結果と、最も高い評価を集めた《みほとけは》と題する詞が紹介されています。

公募したのは大谷楽苑。音楽により宗教的な情操を養うことを目的として、真宗大谷派が結成した演奏団体です。新しい仏

教讃歌を創作し、演奏活動だけでなく、楽譜やレコードの刊行を通じて普及にも力を注ぎました。詞の公募は、世代を超えて楽しく歌えることを目指して、発足直後から数回行われ、記念すべき第一作に選ばれたのが、《みほとけは》だったのです。

作詞者の仲野良一は国文学者で、後に大谷大学の教壇に立ちました。また、作曲者の信時潔は戦前から、勤務先の東京音楽学校(現・東京芸術



《みほとけは》が歌われるなかで献華＝今年9月18日の千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要で



収録CD: 『御堂演奏会2009 練習用CD』
収録楽譜: 『仏教讃歌一歌集』(本願寺出版社刊)

※スマートフォン、タブレットなどで上記QRコードを読み込むと掲載曲を聴くことができます。ご加入のプランなどに注意してご利用ください